

2026 年 10 月 7 日 高の原教会 聖書講座および晩祷会 徳田 信

テーマ：人間に従うよりも

聖書：使徒言行録 5 章 27～42 節

1 はじめに

周りの人と違う考えを口にするのは、勇気のいることです。関係を悪くしたくない、面倒な人だと思われたくない。そう考えて、出そうとした言葉をのみ込むことがあります。一方、自分の考えに自信があると、人の話が耳に入りにくくなることもあります。人と関わりながら生きる中で、私たちはその両方を経験しているのではないのでしょうか。

今日の箇所、ペトロと使徒たちは、イエスについて語ることを禁じられます。それに対して彼らは、「人に従うより、神に従うべきです」（29 節、聖書協会共同訳）と答えました。よく知られた言葉ですが、彼らは何を伝えようとして、こう語ったのでしょうか。前後の出来事にも目を向けながら読んでいきたいと思えます。

使徒たちの答え、それを聞いた人々の反応、そして釈放された後の歩みをたどりながら、神に従うということを、私たちの日常や教会のあり方に重ねて考えてみましょう。

2 再び最高法院の前に立つ 27～28 節

最高法院は、大祭司を中心に宗教指導者たちが集まる議会です。使徒たちは、すでに 4 章でも尋問され、イエスの名によって語ったり教えたりすることを禁じられていました。それでも福音を伝え続けたため、再び捕らえられます。

今日の箇所の少し前には、使徒たちが牢から導き出され、神殿で人々に語るよう命じられる場面があります（5 章 17～26 節）。彼らは、その言葉に従って神殿に戻りました。神から語るように命じられたことを、人間からは語るなと命じられる。その間に立たされたのが、ここでの使徒たちです。

大祭司は、禁止命令を破ったことを責め、さらに、イエスの死の責任を自分たちに負わせようとしていると抗議します。神の民を導く立場にありながら、自分たちの判断を問われることには反発する。その姿は、教会の指導者にとっても、他人事としては読めないでしょう。

なお、この場面を、ユダヤ人とキリスト者の対立として単純に捉えることには注意が必要です。ペトロたちもユダヤ人であり、同じ先祖の神を信じています。ここで問われているのは、主イエスを巡ってなされた具体的な判断と、その責任です。それを民族全体の責任に広げてしまうと、本文を読み違えることになります。

3 神に従うとはどういうことか 29 節

ペトロたちの言葉は、人間の権威に従うことには限界があると告げています。どのような地位や肩書を持つ人も、神に代わることはできません。ただし、ここで彼らが拒んでいるのは、主イエスについて語るのをやめよ、という命令です。人の意見を聞かなくてよいとか、信仰があれば社会の決まりを軽視してよい、というところまで話を広げることはできないでしょう。

この言葉は、教会の内側にも向けられています。牧師や役員の言葉、長く続いてきた慣習、多くの人が支持する考えも、それだけで神の御心と言えるわけではありません。大切に受け継いできたものについても、時には立ち止まり、聖書に照らして確かめる必要があります。

そして、「神に従う」と語っている自分もまた、一人の人間です。自分は神の御心分かっていると思うあまり、異なる意見を聞けなくなることもあるでしょう。私自身、教会で語る務めを担う者として、このことは忘れずにいたいと思います。確信を持っているときほど、自分にも見えていないことがあるかもしれない、と考える余地を残しておく必要があります。

そのためにも、この言葉だけを取り出さず、聖書の前後の流れや主イエスの歩みに照らして読むことが大切です。また、自分の判断によって影響を受ける人の声にも耳を傾けたいと思います。そうする中で誤りに気づいたなら、訂正することも含めて、共に神の御心を尋ねていくのでしょうか。

問い 「神に従う」ことと、自分の考えを押し通すことは、どう違うのでしょうか。自分の思い違いに気づかされた経験はあるのでしょうか。

4 使徒たちが伝えようとしたこと 30～32 節

続く 30～32 節を読むと、使徒たちが何を語らずにはいられなかったのかが分かります。十字架につけられたイエスを、神は復活させ、導き手、救い主として高く上げられました。使徒たちは、この神のなさったことを証ししています。29 節の言葉も、その証しをやめるわけにはいかないという思いから出ているのです。

「木に掛けて」とは、十字架の死を指します。人間の判断によって退けられた主イエスを、神は復活させられました。今、裁かれる側に立っている使徒たちは、自分たちを裁く人々の権威を超えて働かれる神を信じています。その信仰が、彼らの言葉を支えているのでしょうか。

31 節では、神がそうなさったのは、イスラエルを悔い改めに導き、罪を赦すためであると語られます。使徒たちは、相手の責任を厳しく問うと同時に、その人々にも赦しが与えられることを告げています。彼らを尋問している人々も、神に立ち返るよう招かれているの

です。過ちを認めることはつらいものですが、その先にも神と共に生きる道がある。ここには、その希望が語られています。

それを語っているペトロ自身、かつて主イエスを知らないと言い、後に激しく泣いた人でした（ルカ 22 章 54～62 節）。主イエスは、その失敗に先立ってペトロのために祈り、立ち直った後には兄弟たちを力づけるよう語っておられます（22 章 31～32 節）。自らも赦しを必要とした人が、今、他の人に悔い改めと赦しを語っている。このことを心に留めて、ペトロの言葉を聞きたいと思います。

32 節には、使徒たちと共に、聖霊も証人であると記されています。彼らは、証しする務めを自分たちだけで負っているとは考えていませんでした。神の働きに支えられて語っている。そのことは、人々の反発や自らの恐れに向き合う中で、どれほど力になったことでしょうか。

問い 使徒たちの言葉に厳しさを感じるとしたら、どこでしょうか。希望を感じるとしたら、どこに感じるでしょうか。ペトロ自身の経験を重ねると、どのような響きになるでしょうか。

5 ガマリエルの言葉 33～39 節

使徒たちの言葉を聞いた議員たちは激しく怒り、彼らを殺そうとします。そこに立ち上がったのが、ファリサイ派の律法の教師ガマリエルです。使徒言行録 22 章 3 節では、パウロもこの人のもとで学んだと語っています。人々から尊敬されていたこの教師は、その場の怒りに加わらず、使徒たちの扱いに気をつけるよう語り始めます。

ガマリエルは、過去に現れては消えていった運動を挙げます。人間の企てなら、いずれ崩れていく。しかし、神から出た働きなら、人間には止められない。使徒たちを処罰することで、自分たちの方が神に逆らうことになるかもしれない、と警告するのです。

ガマリエルがイエスを救い主として信じたとは、ここには記されていません。それでも、彼の言葉によって、使徒たちを殺そうとする動きは押しとどめられました。使徒たちとは立場の異なる人の言葉が、その命を守るようになったのです。

もっとも、ガマリエルの言葉から、長く続くものや成功するものはすべて神から出ている、と結論づけることはできません。人を傷つける制度が長く続くこともあれば、誠実な働きが厳しい状況に追い込まれることもあります。彼はここで、怒りに任せて人の命を奪おうとする仲間に、急いで判断を下してしまわないよう求めています。

ガマリエルも、神を信じ、その御心に従おうとしていたのでしょう。だからこそ、自分たちの判断が神の御心と食い違っている可能性も考えました。神を信じることが、自分たちの正しさを疑うことにもつながっているのです。

問い ガマリエルの言葉をどう受け止めますか。意見の違う人の言葉によって、自分の見方が変わったことはあるでしょうか。

6 釈放された使徒たち 40～42 節

議員たちはガマリエルの勧めを受け入れ、使徒たちを殺すことは思いとどまります。しかし、鞭で打ったうえで、再びイエスの名によって語ることを禁じ、釈放しました。使徒たちは怪我を負って最高法院を出ていくことになったのです。

その使徒たちが、イエスの名のために辱めを受ける者とされたことを喜んだ、と記されています。私たちには、なかなか理解しがたい喜びかもしれません。人々から辱められても、彼らにとっては、主イエスに結ばれていることの方が大きかったのでしょうか。鞭で打たれた痛みの中にも、その喜びがあったということです。

もちろん、これを苦しんでいる人にそのまま当てはめることには慎重でありたいと思います。傷つけられ、苦しさを訴えている人がいれば、その声を聞き、安心して過ごせるよう共に考え、必要な助けを求めることが必要です。また、批判を受けたときには、自分たちの振る舞いを省みる必要もあります。批判や苦難を受けたからと言って、それが必ずしも信仰ゆえの試練と言えるかはわかりません。

42 節には、使徒たちが神殿や家々で教え、イエスについての福音を伝え続けたことが記されています。牢を出て神殿に戻ったときと同じように、彼らは再び託された務めに戻りました。厳しい禁止命令を受け、鞭で打たれても、日々、人々に主イエスのことを語り続けたのです。

7 共に御言葉を聞く教会として

教会にも立場や経験の異なる人々がいます。思っていることをすぐに言葉にできる人もいれば、なかなか口にできない人もいるでしょう。いつも発言する人の言葉を聞くとともに、まだ十分に聞けていない声にも心を向けながら、教会生活を送りたいと思います。

今度の主日礼拝では中元神学生が説教を担当して下さいます。今日の学びで気づいたことや疑問に思ったことを携えながら、同じ聖書の箇所から、さらにどのような言葉を聞くことができるか、楽しみにしたいと思います。語る者も聞く者も、御言葉によって養われる一人ひとりです。

問い 今日の箇所で心に残った言葉や、もう少し考えてみたいことがあれば、分かち合いたいと思います。